

こうやって、 センスは生まれる

著：秋山具義

単行本：312 ページ

出版社：SB クリエイティブ

価格：1,870 円（税込）

はじめに

「あの人センスあるよね」。普段、何気なく口にする言葉ですが、改めて意味を問われると説明に窮するのではないのでしょうか。本書の著者は、「マルちゃん正麺」やAKB48「ヘビーローテーション」のCD ジャケットなどを手がけてきたアートディレクターです。抽象的に語られがちなセンスを、言語化しています。

人をハッとさせるアウトプットとは

そもそもセンスとは何でしょうか。著者はこれを「人をハッとさせるアウトプットを生み出す力」と定義します。本書によると、まったく予測がつかない情報は混乱を生み、逆に予想通りの情報は退屈を招くそうです。人の心を惹きつけるのは、理解できる範囲のなかで少しだけ裏切られる絶妙なズレ。情報を派手に飾るのではなく、その奥に潜む本質を掘り出して相手に届く形に整える力こそがセンスだと、著者は説きます。

なぜ一歩先ではなく半歩先なのか

本書の核心となる概念が「半歩先」です。あまりに時代を先取りしすぎた一歩先の提案は、受け手にとって独りよがり映ってしまいます。かといって、現在地そのままの提案では誰の心も動きません。受け手が「あ、それいいかも」と直感的に理解でき、かつ「今までにない」と驚ける絶妙な距離感。これが「半歩先」だと著者は指摘します。この感覚を磨くには、世の中の「普通」がどこにあるかを正確に把握する力が前提となるそうです。

【知覚】「見る」を「観る」に変える

本書はセンスを磨くプロセスを「知覚」「組み替え」「表現」の3つのフェーズに整理しています。その土台となるのが、世界を観察する「知覚」です。多くの人は街を歩く際に視覚情報を漫然と受け流していますが、著者は「なぜこの看板はここにあるのか」「なぜこの言葉が心地よいのか」と問いを立てる習慣を勧めます。子どもの

ように「なぜ？」を繰り返す「どちて坊や」体験、なんとなく感じた違和感を言語化して記録する「違和感ジャーナリング」、空間全体を俯瞰する「鳥目線」と細部に執着する「トンボ目線」の往復など、日常で実践できる手法が豊富に紹介されています。

【組み替え】ピアノ階段に見る発想の転換

2 番目の「組み替え」とは、知覚で得た断片に新しい意味を与える作業です。本書ではスウェーデンの社会実験「ピアノ階段」が紹介されています。駅の階段を鍵盤に見立て、踏むと音が鳴る仕掛けにしたところ、人々はエスカレーターではなく階段を選ぶようになったそうです。既存の構造に異なる文脈を重ねる発想こそが、組み替えのセンスだと著者は説きます。

【表現】語らない勇気が想像を呼ぶ

最後のフェーズが「表現」です。本書で印象的なのは、すべてを説明しすぎず受け手の想像力に委ねる「余白アウトプット」というメソッドです。松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」のように、どんな蛙か、どんな音かを語らないからこそ、読み手のなかで世界が立ち上がります。会議のプレゼンでも、伝えるより感じさせる、言い切るより匂わせる姿勢が、人の心を動かすのだと著者は説きます。

センスは日々の観察から育つ

本書が伝える真のメッセージは、センスを「自分にはない」と言い訳にしないことです。日々の丁寧な観察と選択の質を高める努力によって、センスは後天的に磨ける力だと著者は語ります。情報や正解が簡単に手に入る時代だからこそ、半歩先を見抜く独自の視点は、経営判断や提案、人材育成の場面でも武器になるはずです。自社の商品やサービスをもう一段磨きたい方に、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。